

保育・幼稚園教育実習事前事後指導に関する定性的研究 A Qualitative Study on Pre- and Post-programs for Teaching Practice at Preschools

松本宗久*・永易直子**
MATSUMOTO Munehisa NAGAYASU Naoko

要 旨

幼稚園教育実習指導における、実習にむけての指導は多岐にわたっており、教育実習事前事後指導の規定の時間内では、十分な指導ができないのが現状である。社会的には保育者の専門性や資質能力の向上に対する要請が高まっている中、実習に送り出す前に十分な準備を効率的に行っておく必要がある。また、効率的なプログラムの構築には実習生の声を聴き、プログラムの改良をしていくことも大切である。しかしながら、これまでの保育者養成機関のカリキュラムにおいては、実習生の意見が反映されてきたとは言い難い。そこで、本研究では、幼稚園教育実習事前事後指導の授業を受講した学生に対して課したレポート課題の記述内容に着目し、そこに沈殿している多様な概念を掘り起すことで、幼稚園教育実習の保育者養成の指導に活かす方法を模索した。その上で、保育者養成機関が、事前事後指導の授業内容の質の充実や向上を図るための方向性や展望を探った。

Abstract

The contents to be covered in the course of pre- and post-teaching practice at preschools are too wide-ranged to fit in the provided course time. Under the raise of social needs for knowledgeable and skillful child care workers, it is important to train student teachers sufficiently before they start their student teaching at preschools. To develop a better pre- and post-course, it is essential to incorporate students' opinions to revise the contents of the course. However, this is not usually the case in the curriculum development of many childcare training institutes. In this paper, we examined the comments in previous student teachers' reports to find out some hidden necessary contents for the course, and suggest the possibility for child care training institutes to utilize students' opinions to make the course more effective.

キーワード：教育実習，保育実習，実習事前事後指導

Keywords：Teaching Practice, Internship at Preschool, Pre- and Post-Teaching Practice Programs

I. 研究テーマと目的

本研究では、短期大学において保育者を養成するにあたり、二年間実施される幼稚園実習Ⅰ・Ⅱ、加えて保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、事前指導において、実習者が立てた自身の目標と照らし合わせ、①「実習の目標」②「実践しわかったこと」③「どのような保育者になりたいか」について、事後指導の授業内で実習者自身が発表し、レポートにまとめたものを分析・検討した。その上で、養成機関での実習事前事後指導や、教職実践演習および保育者論などの授業において、その内容充実、受講者の資質向上の方策について結果を元に考察した。

II. 研究の背景と先行研究

II-1 研究の背景

保育者養成機関の質の充実のために、幼稚園教諭や保育士の資質の向上の方策を検討する事は、必要不可欠である。しかし、これまで教育者全体の資質向上の中に含めて論ぜられることはあったものの、特に保育者養成機

関にしぼって本格的に論議されたことはなかった。

加えて、幼稚園教育実習指導における、実習にむけての指導は多岐にわたっており、規定の時間内では、十分な指導ができないのが現状である。にもかかわらず、社会的には保育者の専門性や資質能力の向上に対する要請が高まっている。

そのため（幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書 2002）¹⁾では、『養成段階における課題として、教員志望者の多様な体験の確保や得意分野の素地の形成、実践力の育成、教員養成のための教育環境の充実、上級免許状の取得や免許状及び資格の併有、幅広い幼稚園教員または、保育士志望者の確保があげられる。』としている。

保育者は、幼児を内面から理解した上で、幼児の主體的な活動が確保されるように物的・空間的環境を構成するとともに、また幼児の活動を豊かにするための役割が期待されており幼児教育における中核的な役割を担っている。このため、保育者養成機関が、優れた人材を育成

*大和大学教育学部教育学科（数学教育専攻） **関西福祉科学大学 社会福祉学部 臨床心理学科

平成28年9月30日受理

し、またその資質向上を図ることは極めて重要である。

II-2 先行研究

(永易2014)²⁾では、実習指導者が実習生を評価する際、①『意欲』・②『責任感』・③『礼儀作法』・④『保育技能』の4つの概念に着目して評価していた、と提唱された。

概念別に詳しくみると、①『意欲』では、「課題を持って取り組む」、「自ら進んで活動していた」などの肯定的な評価と、「自ら学ぶ姿勢がない」、「意欲が感じられなかった」などの否定的な評価の記述が見られた。

②『責任感』では、「責任を持って取り組むことができた」、「体調管理の不十分さや自ら進んで行動できない」、「子どもの安全について配慮ができなかった」などの記述が見られた。

③『礼儀作法』では、「挨拶」や「礼儀正しい」といった記述が多かったが、「返事や挨拶ができない」、「身だしなみが悪く靴のかかとを踏んでいた」などの否定的な評価も散見された。

④『保育技能』では、設定保育に必要な「ピアノ」、「絵本の読み聞かせ」、「手遊び」、「製作」、「指導案作成」などの基本的な保育技能不足に関する記述が多く見られたが、一方で、実習中に努力をした学生には技術が足りなくとも前向きな姿勢は肯定的な評価を受けることが示唆された。などである。

更に、実習生が子ども達と関わる場合、「笑顔」(子どもの目線)が大切であることが強調されている。よって、幼稚園教諭と園児との関係は、笑顔が基本的な関係であることから、実習生の表情に笑顔が見られない時は、子ども達との交流がうまくいっていないことが考えられることを明らかにした。

また、(永易2015)³⁾では、教育実習生が実習後に作成したレポート課題から、そこに沈殿している多様な不安を概念カテゴリーに分類して掘り起し、幼稚園実習前の実習不安感とはどのようなものかについて考察している。そこでは、課題把握の方法を提示し、定性的研究を行った結果、実習生は『保育技術』(主にピアノの技術不足)や、『子どもとのかかわり』について不安を持っていることを明らかにしている。

以上のことを踏まえ、本研究では(永易2015)の調査手法をもとに、学生のレポート課題の内容の中に沈殿している、実習において実習生が体得したことについて調査した。

III. 研究の方法

対象 大阪府内にある〇短期大学保育学科38名

調査時期 2014年2月

調査内容 幼稚園実習事前事後指導Ⅱの授業内で、事後指導において発表会にて発表したものをレポートとしてまとめるよう課題を課した。レポート内容として、実習生の1)「実習の目標」、2)「実践しわかったこと」、それをふまえて3)「どのような保育者になりたいか」、の3つの項目について文章で記述させることで、実習生が、その目標及び学び、加えて保育者像を把握することを目的とした。

調査方法 上記のレポート課題を、定性的手法によって、いくつかの概念カテゴリー(コード)に分類し、定性的コーディングの手法を用いて分析した。佐藤郁哉氏の質的研究法⁵⁾を参考に、各項目の概念カテゴリー群を、テキストをセグメント化した後、KJ法⁶⁾を用いて、「ラベル拡張」、「ラベル集め」を行った。その上で、ラベルのグループ編成・集約コーディングを行うことで、テキストを分類し、概念コードを抽出した。最後に、概念コード毎に全体との割合を百分率で算出した。

尚、本稿においては、(1)定性的手法および(2)定性的コーディングを(佐藤郁哉, 45頁)⁵⁾にしたがい、以下の手法を用いて行った。

(1) 定性的手法 『ある対象に関する「考え方」や「理解」などの人々の認識を言葉で表現したもの。言葉は定性的(質的)なデータである。ある対象に対する人間の認識(理解)に関する表出は、様々な仕方でも収集することができる。例えば、参与観察によって、その対象に対してどのように関わっているか、関わっている際の「行動」や「言説」を記録し、質的データとすることや、その対象に対してある人物が考えたこと思ったことを記述した日記やレポートなどの「文章」(ドキュメント)を定性的データとみなす方法である。』

(2) 定性的コーディング 『文字テキスト資料の一部に対して単語や単文の形式のコードを割り振ることによって、データを縮約しながらも同時にいつでも元の文字資料の文脈に立ち戻って参照できるようにしておくための工夫である。』

IV. 研究結果

コーディングの結果として、レポート内容の3項目について、それぞれ、以下のような概念コードが抽出された。

1) 実習の目標

実習生は、「実習の目標」を、①「子どもへのかかわり」(89.2%)②「積極性」(55.5%)③「礼儀作法」(48.1%)④「保育技術」(11.1%)という、4つの概念で考えていることが明らかになった。(以下の項目も含め、各概念の末尾に、その概念を記述していた学生の割合を示し

た)

各概念における学生の記述した主な事例は以下の通りである。

①**子どもへのかかわり** 『子どもたちの目線に合わせて話をする』、『成長や発達に応じた関わりをする』、『クラス全体の子どもたちと万遍なく、どの子にも関わる』、『個々の子どもにあった言葉がけをする』

②**積極性** 『保育者の仕事を理解し、進んで取り組む』、『自分の出来そうな部分があれば積極的に動く』

③**礼儀作法** 『きちんと挨拶をする。返事をする』、『保護者や、子ども、園の先生方に元気よく挨拶をする』、『言葉づかいに気を付ける』

④**保育技術** 『保育者の子どもへの対応、配慮、援助の仕方を実践できるようにする』、『危険を未然に防げるよう対応を学ぶ』、『ピアノを事前に練習し、子どもの前で弾き歌いができるようになる』

2) 実践しわかったこと

実習生は、「実践しわかったこと」について、①「子どもとのかかわり」(59.2%) ②「子ども理解」(44.4%) ③「デイリープログラム」(29.6%) ④「実習指導者とのかかわり」(25.9%) ⑤「保育者自身が楽しむ」(18.9%) という、5つの概念で考えていることが明らかになった。(尚、上の概念に含めにくいものについて、⑥その他(11.1%)でまとめた)

各概念における学生の記述した主な事例は以下の通りである。

①**子どもとのかかわり** 『保育者の言葉かけや、援助の仕方ですべての子どもが動かされることが分かった』、『積極的に名前を呼ぶことで、子どもからも話しかけてくれるようになった』、『子どもへの気配りと配慮、または、叱り方ほめ方は大切』

②**子ども理解** 『個性を理解するのはとても大事な事だと思います』、『同じクラスでも成長の遅い子どもや、早い子どももいる中で、一人ひとりを理解し関わることで成長、発達につながるということがわかった』、『遊んでいるうちに好きな遊びや、嫌いな遊びが分かりどんなことをすれば、楽しく遊んでくれるかが、理解できるようになった』、『一人ひとりの関わり方が違い、個々に合わせた言葉がけをすることが大切』

③**デイリープログラム(実習日誌含む)** 『一日の流れをスムーズに進めることが出来るとその分、絵本や手遊びをできる時間が増える』、『あらかじめ、園のデイリープログラムを理解することにより、一日の行動が行いやすくなった』、『全体の流れをメモしておく、その場にあった言葉がけがしやすい』、『記録をしっかり書く事で、子どもと関わる事が苦手な私でも、また、違った視点から学ぶことが出来ました』

④実習指導者との関わり

『全力で取り組んでいたら他の先生方から、声をかけてくださり、保育者としてのご指導をたくさんいただくことができた』、『毎日きちんと挨拶することで子どもや職員の方とコミュニケーションが取りやすくなる』、『先生方から、指導されたことを見直すことにより、翌日から注意できるようになった』

⑤保育者(実習生、実習指導者)自身が楽しむ

『自分自身が笑顔でいると子ども達から寄ってきてくれることがわかった』、『自分が楽しそうに遊んでいたら、子ども達も楽しく遊んでくれた』、『自分自身が楽しくかかわることで、子ども達や保育の業務に積極的に取り組むことが出来る』

⑥その他

『失敗しても恐れない』、『2週間寝坊もなく、早起きがつらくなかった』、『練習して弾けるようになって、子どもの前ではうまく弾けなかった』

3) どのような保育者になりたいか

実習生は、「どのような保育者になりたいか」について、①「子ども理解と、一人ひとりを大切にする。」(88.8%) ②「はじめのある保育者」(29.6%) ③「保育の知識」(29.6%) ④「保護者へのかかわり」(25.9%) ⑤「笑顔の絶えない保育者」(14.8%) という、5つの概念で考えていることが明らかになった。(①のコードが2語で定義付けられているのは、切り離すことが困難であったため、一括りで取り上げるためである。)

各概念における学生の記述した主な事例は以下の通りである。

①**子ども理解と、一人ひとりを大切にする。** 『大きくなって思い出してもらえるような保育者』、『子ども達が喜んで登園するような楽しい保育者』、『個々の子どもに合わせて対応ができる丁寧な保育者』、『一人ひとりの個性や成長を大切に子どもと関われる保育者』

②**はじめのある保育者** 『ほめる時は思い切り褒め、いけない事をしたときにはきちんと叱れる保育者』、『はじめのある保育をする』、『子ども達のモデルになれるような、話し方、態度が必要』

③**保育の知識** 『保育者も子どもと一緒に学ぶ姿勢が大切』、『正しい声掛けができるよう、勉強が必要』、『子どもに関する知識を身に付ける』

④**保護者への関わり**、『保護者の支援もできる保育者になりたい』、『保護者との関わりも大切にできる保育者』、『保護者から信頼される保育者』、『保護者との連携を大切にする』

⑤**笑顔の絶えない保育者** 『笑顔が絶えなくて、免疫力を高め、自分の意志をしっかり言えるようにできる保育者』、『笑顔を絶やさず、愛情をもって一人ひとりの子

ども達と関われる』、『自分の機嫌や体調が悪くても子どもには関係ないので、子どもの前では笑顔でいられる』

V. 考察とまとめ

V-1 考察

今回の定性的研究で明らかになったことを項目毎に述べる。

1) 実習の目標

実習生が実習に挑むにあたって、実習の目標をはっきりと意識化することにより、実習中は課題達成に向けて意欲的に取り組むことができる事が明らかになった。

厚生労働省の保育士養成カリキュラム⁴⁾の保育所実習Iでは実習の目標が、以下のように定められている。

1. 保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。
2. 観察や子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深める。
3. 既習の教科の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。
4. 保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する。
5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。

上記の目標をふまえ、今回の調査結果を見ると、実習生が、実習の目標を①子どもとのかかわり②積極性③礼儀作法④保育技術の4つの概念で考えていることから、実習指導者らによって、厚生労働省の保育士養成カリキュラムが学生に浸透し、実習生の目標の持ち方が正しく指導されたと示唆された。

2) 実践しわかったこと

①「子どもとのかかわり」、②「子ども理解」の概念コードに分類された記述からは、以下の2点が明らかになった。すなわち、実習生が実習へ赴き様々な体験をする中、子どもたちとの関わりを実践することで、名前を早く覚え、呼ぶことが子どもたちとの関係性が良好になる事を学べたこと。また、実習園での、実習指導者の保育を観察し、保育者の言葉かけや、援助の仕方での子どもの気持ちが動かされることが体験でき、子どもへの関わり方の大切さや、子どもを理解する重要性を学ぶことができたこと、である。

③「デイリープログラム」、④「実習指導者とのかかわり」、⑤「保育者自身が楽しむ」の概念コードに分類された記述からは、子どもに接する機会が少ない学生達にとって日案(デイリープログラム)を作成するのは、机上の空論になりかねないが、実際に実習生として実習園に赴くことで、あらかじめ、園のデイリープログラムを理解することにより、一日の行動が行いやすくなった

ことが明らかになった。

大学で学ぶ理論と実習園で学ぶ実践の融合を、いかに図るということは、保育者養成にとって根本である。これらのことを保育・教育実習における具体的な保育者(実習指導者)との出会いを通して体得することが出来たと推測される。

⑥その他の記述からは、学生自身が実習前に自己管理や、準備を行い実習に挑んだことが明らかになった。

3) どのような保育者になりたいか

(文部科学省2002)¹⁾では、幼稚園教員の資質について、『幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で、発達に必要な経験を幼児自ら獲得していくことができるように環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力を持つことが重要である。また、家庭との連携を十分に図り、家庭と地域社会との連続性を保ちつつ教育を展開する力なども求められている』と示されている。

今回の学生の記述からは、実習生が、実習園で指導者の様子を観察する事で、指導者の行動原理が学生たちの良きワーキングモデルになっている事が示唆される。例えば、自らが保育者になるに於いての理想や課題などの視点を持っている事、更に、子どもたちの育ちに関わる保育者(実習指導者)として、より高度な専門性と資質の向上をめざして自己研鑽に努めている事などである。

V-2 まとめ

以上の考察をふまえて保育者養成機関における実習事前事後指導の質的向上の方策について筆者らの見解を述べる。

文部科学省(2002)¹⁾において、養成、採用段階からの実践力を重視する観点から、養成段階において、実践力を重視したカリキュラムにより理論と実践を結び付けること、インターンシップの活用や実践力に着目した採用と試用期間の適切な運用を図ることが考えられる。としている。

保育を日々行うということは、教員自身の豊かな体験を背景として展開されることが多く、教員及び教員志望者は、生活体験や自然体験、社会奉仕体験など、自らの豊かな体験を積極的に積むことが望まれる。

文部科学省(2002)¹⁾は、知識や技術に立脚した活動や内容にとどまらず、幼児の興味を引き出し、幼児の充実感を味わうことができるような、保育者養成を行っていかなければならない。としている。また、2011年より保育士養成課程検討会では、現代の子どもを取り巻く社会の変化を受け、現行の養成課程の見直しを行った。その結果、『保育相談支援』、『保育の心理学』、『保育課

程論』『保育・教職実践演習』を付加などの科目を新設した。

教育実習に必要とされる知識・技術は広範囲にわたり、現状において保育・幼稚園実習事前事後指導という科目内でこれらすべてを網羅するのは困難である。加えて、2011年に保育士養成課程検討会で、保育士養成課程科目も増えていることもあり、他教科での学びを実習に向けて結び付けられるよう教員が学生に指導・助言を行う。また、それらの教科との連携がスムーズに行えるよう養成機関全体で検討・調整を行う。

保育者という職業が学生自身にとって適切か不適切か葛藤しながらも、学生が自らの実習を振り返り、実習で学ぶことの意義を修得する機会を増やしてけるよう今後の課題にしたいと考える。加えて、現場が求めている保育者像について調査し、今後の教育実習における指導の方向性の改善の検討を行う。

今後も、調査研究を行うことで、養成機関が、学生が保育者としての優れた資質を持てるような方策を講じることができるよう考えていきたい。

VI. 引用文献と参考文献

VI-1 引用文献

- 1) 文部科学省 (2002) 「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm
- 2) 永易直子 (2014) 「幼稚園教育実習生の評価に関する定性的研究—『笑顔』の保育者的意味とは—」大和大学研究紀要第一号 p 137-140
- 3) 永易直子 (2015) 「幼稚園教育実習生の不安に関する定性的研究」大和大学研究紀要第二号 p 289-294
- 4) 厚生労働省 保育士養成カリキュラム <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf>

VI-2 参考文献

- 5) 佐藤郁哉 『質的データ分析法』新曜社, 2003年, p 45, p 114—p 124
- 6) 川喜田二郎 『KJ法—渾沌をして語らしめる』中央公論社, 1986年, p 125, p 127, p 130

